

縄文のうた

宮坂 吉一（茅野市）

① 昔昔もっと昔

縄文のビーナスが生まれた頃

そう 五千年も前の話をしよう

ハヶ岳の裾野は 今よりもっと温かく

果てしなく豊かな土地が広がって

綺麗な水が魚を育て、木の実を両手に溢れんばかり

狩りに行けば獲物には困らない時代

争う事を好まず 神を敬い 物を作り蓄えた

縄文時代中期 この文化の華やいた頃

ビーナスの耳にはピアスの穴が

お洒落は今に負けない

神に捧げた土偶 まさに神秘的

実用品以上の土器 把手の素晴らしさは神業

何時までも続く文化を信じた人達

今 誰が笑えるだろうか

都会にはばかり人が集まり

異常気象を科学で変えられるかと 考える

② 昔昔がチョット過ぎて

仮面の女神が誕生しました

そう 四千年 前の話をしよう

ハヶ岳の裾野に 冷たい風が吹き始め

木の実も次第に少なく成って来た
命の水にも氷柱が下がり 魚の影も次第に減りだす
狩りの獲物も日々寂しく成ってしまい
お洒落な「あんぎん」さえも寒さのための着物に成ってしまった
縄文時代の後期 温暖な土地を求めて
移りだし始めた 縄文文化
都市の芽がここに生まれる
土偶は神に成って 土器は地に眠る
何時の日かまた会えると ハヶ岳の麓に蓋をする
新しい時代に日の目を見られると信じ
今 その時が迎えられたが
科学という名の魔物が生まれて
自分自身の力では押さえられない 所まで
都会ばかりに人が集まり
異常気象を科学で変えられるかと 考える